

ウイスコンシン大学 ヒト腫瘍学部と 国際交流を締結

—原爆放射能医学研究所—

環境生物研究部門 伊藤 明 弘
予防腫瘍研究分野

はつらつ

平成六年九月十九日、ウイスコンシン大学ヒト腫瘍学部（UW）と本学原爆放射能医学研究所の間で国際交流の調印式が行われた（写真）。筆者は原医研教授会の一員として、当日原医研所長のサイン入り調印書二通（英文と邦文各一通ずつ）を携えてマジンソン市にあるウ大ヒト腫瘍学部を訪れた。広島地方はちょうどこの頃長期の渇水状態に見舞われていたが、彼の地は豊富な水を湛えた湖沼地方で、少し淡ましく感じたものであった。



左：カルボン・ポール教授（所長，血液学）
中央：伊藤明弘（筆者，実験病理学）
右：クリフトン・ケリー教授（放射線生物学）
ウイスコンシン大学ヒト腫瘍学部5階セミナー室にて
調印式当日撮影（平成6年9月19日）

かつてビタミンAやBが発見され、遺伝子の合成が初めて行われたウイスコンシン大学は、湖に囲まれたのどかな町に佇んでいた

ウイスコンシン州はアメリカ北部のミシガン湖の西側に位置し、州の産業は酪農が中心である。大学は首都マジンソンにあり、広島と比べ人口は僅か十万人で、そのほとんどは学生と大学関係者であり、湖に囲まれたのどかな場所にある。

町全体が学校のような佇まいを示しており、湖畔に点々と校舎が並びその間を車道が通っている。この大学でビタミンAやBが発見され、遺伝子の合成が初めて行われた。また、骨髄移植も初めて行われたという記録がある。一九七〇年代にはハワード・ティミン博士がノーベル医学生理学賞を受賞していることでも知られている。また、医学、生物学系が充実しており、多くの研究者を輩出していること、癌研究で有名なマッカードル研究所も附設されている。

ヒト腫瘍学部（Department of Human Oncology）は、当研究所と同じく基礎系と臨床系よりなり、放射線を中心として、遺伝子、細胞、個体レベルの学問を関連させたユニークな放射線生物研究システムを確立している。

本研究所の横路謙次郎博士（名誉教授）とUWのクリフトン・ケリー教授が、約三十年前に米国・ボストンの癌研究所で机を並べておられた経緯から、本研究所より渡辺敦光（わたなべ・ひろみつ）、神谷研二（かみや・けんじ）両氏

らを始めとして、多くの若い研究者がUWで研究活動を行い、現在も継続している。また、先のクリフトン・ケリー、グールド・マイケル両教授は、しばしば広島島の放射線影響研究所や当研究所を訪れ、学術交流を行っている。

従って、実質的には二十年以上の研究室間での交流があり、今回の締結は自然の成りゆきと考えられる。

今後の研究テーマや交流についての展望

筆者を含め、現在の大学の先輩や在職者の多くは欧米（主として英、独、仏、伊）での留学または留学経験者である。そして、その世代は二世、三世に入ろうとしている。従って、学問の方向性、考え方、手技などいづれ

をとっても欧米の研究者と遜色のないところに到着している。そのことは、多くの科学論文をみれば明らかであり、どんな雑誌でも、有名なジャーナルには必ず日本人の著者が入っている。

このように経済的発展を背景に科学的にも強くなった日本であるが、科学の世界全体としては、今ひとつ対等になるまでに至っていない。その理由を考えつくまに挙げてみると、



ウイスコンシン大学

- ①言葉のギャップがある、
- ②日本の研究室は日本人のみでまとまっていて、や、国際性に欠ける、
- ③多くの優秀な研究者を引き受けるマーケットが少なく、若い優秀な研究者の発展を妨げている、
- ④社会的に科学に対する期待度が今ひとつ少ない、
- ⑤大学の研究機関の設備が劣悪である、
- ⑥研究者の流動性が少ない、
- ⑦ Supporting Staff が少ない、
- ⑧ヒエラルヒーが少なく人種差別がないことは良いが、研究組織の構築が難しい、

などの弱点も多く指摘される。これらの点を徐々に改善してゆかないと、世界のトップレベルの科学王国に至るのは困難である。

さて国際交流の締結を終えて、これを機会に今後の研究継続が重要である。幸い、当研究所は研究所の改組に伴って新しく国際放射線情報センターが発足し、この機関に二つの客員教授が認められた。そのひとつは旧ソ連からの人材を中心に招へいし、他の一つは先進諸国からの人々を含めて放射線研究に関連した研究者の招へいが可能になった。今後の新しい発展が期待される。

（いとう・あきひろ）